

# やすらぎ通信

第 28 号 (平成 25 年 3 月 1 日) 発行：大阪府立急性期・総合医療センター

## 卯月(麦秋)

### 朧月夜

高野 辰之作詞 岡野 貞一 作曲

(一) 菜の花畠(はなばたけ)に 入日(いりひ)薄れ

見わたす山の端(は) 霞ふかし

春風そよふく 空を見れば

夕月かかりて にほひ淡し(あわし)

(二) 里わの火影(ほかげ)も 森の色も

田中の小路(こみち)を たどる人も

蛙(かわず)のなくねも かねの音も

さながら霞(かす)める 朧月夜(おぼろづきよ)

いよいよ3月、待ち遠しかった春が今年もやってきました。2月まで遠慮がちに咲いていた田んぼの畔や近くの川の堤の日本タンポポや西洋タンポポは急に大きくなり、一株で多くの黄色い花をつけ始めます。また、地の中から遠慮がちに頭をのぞかせ春の到来を一早く告げていたツクシたちも一気に大きく育ち始めます。

幼いころから農村部で育った私にとって、春の訪れの使者はこうしたタンポポやツクシ、スミレやレンゲ、ヨモギといった野草であったり、ゆるんだ川面に顔を出すメダカやモロコ、コブナであったりしました。また早春、遠慮がちに「ホーホケツキョッキョ」と鳴くウグイスや何も植わっていない田んぼの上を空高く「ピーチク、ピーチク」と集団で群れをなして飛び回るヒバリであったりもしました。

しかし、今はこうした農村の春の風景はすっかり変わり、異常に繁殖したムクドリの大集団が、春なお早い時期の収穫遅れの白菜やキャベツ、ブロッコリなどの葉物野菜を集団で食べ尽くすと言う風景にとって代わられました。

私が子どもの頃のあの優しかった自然の姿はどこに行ってしまったのかと思ってしまうす。

しかし、風景は変わったものの、まだ農村部においては自然が残っています。そうした変わってしまった自然の中に、子どもの頃の遊び相手だった、懐かしい草花や川の魚や昆虫、野鳥などを見つけるのが、今も早春の楽しみになっています。

その象徴がタンポポです。近くの佐保川と大和川の合流地点付近から佐保川を上ると、川の堤には多くのタンポポに出会います。大半は西洋タンポポになってしまいましたが、総苞(そうほう)と呼ばれるガクの形から日本タンポポと見分けがつくと、なんとも言えず愛おしい気持ちになり、つい心の中で「頑張れよ」と叫んでしまいます。

私たちをとりまく自然環境は、この半世紀のうちに随分と変わってしまいました。表面的には緑が残っていても、日本古来の種がいつのまにか外来種に駆逐され、自然の中身が根本的に変わってしまっているというケースによく出くわすようになりました。あまりにも淋しいことではないでしょうか。自然も文化と同じく、その地域に住んでいる人間にとって固有の存立基盤であり、その固有性がなくなってしまうと、その地域に住んでいる人間は根無し草のように漂流してしまいます。

それゆえに、少くない国において、自分たちの固有の存立基盤を守るために、固有の自然や種を外来植物・種から守る努力をしています。世界で一番美しい自然が残されている国の一つにニュージーランドがありますが、このニュージーランドの自然はこうした取り組みの中で守られています。他方、日本の実情はどうでしょうか。都市政策における緑の扱い、あるいは森林政策における樹種の扱いは、経済性や効率性の観点から、質よりも量の確保を、本来の原生植物よりも経済性の高い樹種をとの観点から専ら取り組まれてきたと言っても過言ではないでしょう。

その象徴は、戦後の植林政策です。戦時中、山の木を大量に切り出し燃料として使い丸裸になってしまった山林に戦後植えられたのは、太古以来植わっていた照葉樹林と呼ばれる常緑広葉樹などではなく、経済林としてのスギ、ヒノキであり、スギやヒノキ一色の植林政策が一環して行われた結果、日本の山岳部の植生は根本的に変わってしまい、これが、今日山林の荒廃や、深刻な土砂災害の発生など様々な問題を引き起こしております。また、河川でも、白マスやサケは人工的な養殖・方流技術の進歩により、大量に川に戻ってくるようになりましたが、サツキマスや、サクラマスなどそれぞれの川固有の原生種の資源量は大きく減少し、絶滅の危機が叫ばれています。

今回の大震災は、こうしたこれまでの私たちの自然とのつきあい方に大きな警告を与える結果となりました。科学技術への過信と効率性重視の経済システム、自然に対するおごりや高ぶりなど、戦後半世紀を超えて日本社会の中心に据えられてきた社会哲学に大きな問題があったということに気づかされました。

本来、日本人は縄文以来数千年にわたり、こうした哲学とは全く異なり、自然を崇拜し、自然の中に神性を見出し、畏れ、また時として見せる自然の脅威から身を守るために、自然に打ち勝とうと闘うのではなく、自然を受け入れ自然の摂理を活用しながら身や命を守るという態度をDNAの中に組み入れて暮らしてきました。それは美しい四季がある一方、モンスーンがあり、常に台風や地震という厳しい自然の脅威にさらされ、また、時には致命的な巨大地震や大津波に襲われるという、変化に富んだ美しくもあり厳しくもある日本の気象学的、地質学的な条件との出会いの積み重ねの中で、長い年月をかけて習得していった知恵と言えるものです。

こうした日本人の自然との向き合いのなかで、日本人が生み出した宗教的、精神的、文化的かつ自然的遺産に「鎮守の森」があります。鎮守の森は、日本人が太古の昔から、神と出会う場、自然と触れ合う場、神の前で人と人が交流し契を結ぶ場、絆を深める場として、日本人の魂の拠りどころになってきました。

今、再度、日本人が古から保ってきた自然との関係を再構築するためにも、日本人固有の精神文化の根本が壊れ、漂流を始めているように見える今日こそ、今一度鎮守の森が私たち日本人の心の形成に果たしてきた役割を再認識し、精神的な復興に活用していくことが大切ではないでしょうか。

今回は、こうした「鎮守の森」に焦点を当て、日本人の精神文化の形成の原点をたどり、震災を受けてのこれからの自然や科学技術に対する向き合い方について考えていきたいと思えます。



「鎮守の森の 神様の 今日ほめでたいお祭り日 ドンドンヒャララ ドンヒャララ」。これは文部省唱歌「村祭り」の一節です。「鎮守の神様」「鎮守の森」の「鎮守」という言葉が日本の多くの人々に浸透したのは、この唱歌からだと言われていいます。しかし、「鎮守」という言葉自身は中国の魏書、つまり有名な魏志倭人伝が書かれた書物に登場するくらい古くからある言葉で、「鎮守」とは「守り鎮める」という意味で、中国では軍事的な用語で用いられていました。日本でも8世紀に東北の多賀城に置かれた「多賀城鎮守府」、明治になってからの海軍の「舞鶴鎮守府」「呉鎮守府」というようにやはり軍事的な意味合いで多く使われていました。しかし、「神が鎮座するところ」という意味でも平安時代から使われていたようで、この意味で多くの庶民が「鎮守」という言葉に神を想起し出したのは、この「村祭り」の歌が歌われ出しからと言われていいます。

また、「鎮守の神様」「鎮守の森」と同じ意味の言葉は「神社」という言葉です。「神社」は「社」（「杜」とも書く）と同様、古くは「もり」と発音されたようで、「もり」は朝鮮語の「mori(山)」から来ているといわれ、神社とは「神が宿る山（森や林）」という意味で使われていました。

「社」というと現代人にとっては社殿というような建物をイメージしてしまいが、本来はそうではありませんでした。「社会」とは「社（もり）」のなかで人々が会うことを意味し、「会社」とは人々が会う「社（もり）」のことを意味しています。社（もり）は人々が集まり、出会い、共同の意思決定を行う場、祭りや芸能など共同で作業を行う場であったことから発展し、今の「社会」や「会社」という言葉が生まれました。

そして日本人はいつの間にか、森の木々や大きな岩、また山そのものの中に神が存在するという観念を持ち始めました。それは神が天にあり、その天から降りてきたときに最初に人が住む世界に存在するのは山であり、山の高い木々であり、それらのないところでは天に向かって突き出ている巨岩や巨石ということから、次第にそうした観念が神そのものの観念と結びつき、原始的な信仰の形態を徐々に作り上げていったのです（古神道）。この古神道は、明治以降の国家神道や国家に保護された神社神道などとは異なり、純粋で率直な日本人の古来からの自然に対する畏怖の念のなかで形成されていった「ネイティブ・ビリーフ」であり、その古神道の考え方は今日に至るまで日本人の意識の底にしっかりと根を下ろし続けているものです。

少し、寄り道になりますが、かつて、仏教が伝来した時に如何にこの「ネイティブ・

ビリーフ」が根強かったか少しお話ししましょう。

日本に仏教が百済から公式に伝わったのは欽明天皇の頃、538年だと言われています。しかし、仏教が一般の庶民に受け入れられるには長い年月がかかりました。それは、神道の神に対する信仰を長年持ち続けてきた日本人の心が外来の神を祀る仏教を受けつけなかったからです。

日本の仏教の普及に大きな役割を果たしたと言われているのは聖徳太子です。聖徳太子は小さい頃から聡明で、8才の頃には既に難しい仏教の経典を読み解いたと言われています。また、日本の国家の基盤となる17条の憲法を制定し、隋との交流を深め、建築、絵画、製薬、印刷などの最新技術や知見の導入に努めましたが、その中の大きな柱に仏教の本格的な導入がありました。太子自ら「日本仏教の父」と称されるくらいに熱心に仏教に帰依し、そのシンボルとして法隆寺を創建しました。

また、聖武天皇も、日本の仏教の普及に大きな役割を果たしました。聖武朝の時代、国内は内乱が続き、また天然痘などの疫病が流行し治安は乱れていました。この状況を憂慮した聖武天皇は仏教を国教化し、仏教の教えでもって人々の心を統一し、国の秩序と平和を回復しようとしていました。そのために、日本各地に国分寺という官制寺院を建立し、その中心に東大寺を据え、その本尊として巨大な大仏を建立し、中国から鑑真を招き仏教界の混乱を鎮めるなどの対策を次々と実施に移しました。

このように、聖徳太子や聖武天皇の努力により、仏教は人々に深く浸透していったかのごとく思ってしまうのですが、実はそうではありませんでした。まだ、7世紀から8世紀にかけては、仏教はもっぱら僧侶と高貴な一部の人たちの学問の対象でしかなかったのです。仏教を庶民レベルにまで浸透させる上で「ネイティブ・ビリーフ」としての古神道が大きく立ちはだかりました。

こうした状況に危機感を抱いた行基や空海などは、この状況を何とか打破すべく思いついたのが、神道を利用した仏教の普及でした。彼らは「神道の神々は、仏教で言う『仏』や『菩薩』の権現（仮の姿）である」と説きました。こうして、日本の仏教は神道の力を借りて神道と融合するなかで発展を遂げていったのです。このことを神仏習合と呼びました。

この神仏習合の教えは、江戸期における国学の勃興とその影響を受けた明治維新に神道を唯一国家の宗教であると宣言されるまで続いたのです。

多くの仏教寺院に神社が作られ、また神社の中に神宮寺が作られるということになりました。

このことは、いかに日本人の心のなかに古神道が深く根づいているかを象徴する出来事でした。日本人が今日でも、お正月の初詣で神道の神社に1年の無事をお祈りし、夏になるとお盆には仏教の僧侶の力を借りて祖先の霊を慰め、また結婚式や七五三で

は神道の形式に乗っ取り三々九度やお祝いをし、死に当たっては仏教の儀式により死者を弔うといったことを何のためらいもなく行えるのは、この古神道をベースにした神仏習合の考えが無意識のなかに日本人の心に定着しているからです。

さて、お話を鎮守の森に戻しましょう。神道では天から山や木に降臨した神は木の中にその精が住むとされており、その木々の集合体である山や森、林などは神が集住する場所として古くから畏れられ、崇拝されてきました。

鎮守の森は、こうした神々が集住する人々に最も近い場所であり、多くの鎮守の森では人々により森を背に神殿を、またその外側に鳥居が作られました。鳥居は人々が暮らす俗界と神が住む聖界との境界(結界)に建てられ、聖界への入り口を示します。拝殿は文字通り人々がそこから神を崇拝する場所であり、その奥の神殿は神が祀られている場所ということになりますが、仏教のように仏像が置かれているわけでもなく、鏡が置かれているところもありますが、鏡がご神体というわけでもありません。神は神殿の後ろの木々や奈良桜井の三輪明神のように山そのものに宿っているのです。

このように鎮守の森は、人々の生活や労働の場の近くにあって、常時人間が神と出会う場であり、神に祈りをささげる場であり、また、人々が神を介して寄りあい、出会い、ともに芸能を神に披露する場でもあったわけです。まさに日本人の精神的な拠りどころを形成してきました。

こうした鎮守の森は一体いくつくらいあったのでしょうか。明治の初頭の神社の数は全国で約 19 万社あったと言われていました。したがって、明治の初めには全国で約 20 万に近い鎮守の森がありました。当時の人口を 6000 万人として計算しますと国民 300 人に一つの割合で鎮守の森が存在していたことになります。

しかし、この 19 万社あった神社の数は、明治時代に実施された神道の国教化(国家神道化)にともなう神社合祀令で大正年間には 11 万社まで減少してしまいました。

当時、この政府の政策に強力に異議を唱え、積極的な反対運動を展開したのが、あの著名な生物学者、民俗学者であった南方熊楠でした。熊楠は粘菌の研究で名を上げた和歌山県在住の学者でしたが、「合祀の推進は、土着の神を祭った神社の消滅を意味し、そのことは地域村民の心のよりどころであり、コミュニティーのかなめとしての機能の崩壊を意味する。また、神社林の伐採により、形成されている多様な生態系の消滅をもたらす、とりわけ日本人の精神文化形成に重要な関わりのある照葉樹林の破壊につながる」と懸念を表明し、和歌山県を中心に強い反対活動を行いました。

熊楠の視点の先には 100 年後の現代があるかのような優れた先見性がありました。この南方の反対活動に対し、当時国の法制局参事官という高い公職にあった柳田國男が支援したこともあり、熊楠の思いは天に届きました。大正 7 年(1918 年)衆議院で「神社合併無益」の決議がなされ、ついにこの合祀の動きが停まったのです。こうし

た熊楠の努力により、その後の神社数の減少のスピードは落ち、第二次大戦後の都市開発による神社や鎮守の森の消滅はあったものの、未だ全国の神社数は8万社を数えており、鎮守の森もその数に匹敵して残されています。

今日では、鎮守の森は日本独特の照葉樹林の森として人々の精神文化形成に貴重な役割を果たすとともに、CO2の吸収や酸素の放出などを通じ環境保全の面でも重要な役割を果たしています。

ところで著名な歴史学者であり、また京都府亀岡市にある神社の神官を永年つとめて来られた上田正昭京都大学名誉教授（元大阪女子大学学長）は、氏の遺言書ともいふべき近著「死をみつめて生きる」（角川選書）のなかで、こうした鎮守の森が果たしている役割を、次のように書いておられます。

「日本人がいかに自然のなかにカミをあおぎ、自然といかに調和するか、その知恵と経験を蓄積して、暮らしを営んできたか。その象徴ともいふべき存在は、全国各地に存在する鎮守の森であり、沖縄のウタキ（御嶽）の森である。聖なる鎮守の森にはカミが鎮座するので、みだりに鎮守の森の木々を伐採してはならないといういましめが、今でもムラの古老たちの間に生きている。勝手に切ったりすると祟りがあると信じている人々も少なくない。」

「鎮守の森はカミとヒトの接点であり、自然と人間との共生の場であった。奈良時代の村々の人々が春や秋のマツリで『郷飲酒の礼』を行ったことは『大宝令』の注釈書である『古記』などにもうかがわれるが、南北朝のころには、荘園制の枠をこえて惣村・惣郷の結合の場として、鎮守の森が大きな意味を持つようになった。」

さらに上田名誉教授は鎮守の森が日本人の精神形成に果たした役割を踏まえたうえで、この鎮守の森を通じ、自然に神を見出し、神との交流の中で自然とのあるべき向き合い方を学んできた知恵をこれからの社会の基盤にすえつけ直さなければならないとして、若い世代に向け、次のようなメッセージを送っておられます。

「(かつて交友のあった)司馬(遼太郎)さんが若き人のために書いたともいふべき『二十一世紀に生きる君たちへ』のなかの次の文章が忘れられない。この文章は『小学国語』(大阪書籍)のために執筆されているが、是非多くの方に読んでいただきたい。

《人間は — 繰り返すようだが — 自然によって生かされてきた。古代でも中世でも自然こそ神々であるとした。このことは少しも誤っていないのである。歴史のなかの人々は、自然をおそれ、その力をあがめ、自分たちの上にあるものとして身をつつしんできた。その態度は近世に入って少しゆらいだ。— 人間こそいちばんえらい存在だという思いあがった考えが頭をもたげた。二十世紀という現代は、ある意味では、自然へのおそれがうすくなった時代といつていい。》

自然をおそれず、その力をあがめず、人間こそがいちばんえらい存在だとうぬぼれ

てきた現代人が、いかに古代や中世の人間と異なっているかを見事に指摘している言葉だ。人間はひとりでは生きられない。自然と調和し、自然をあがめて共に生き、共に生み出す知恵と体験を蓄積して発達してきた日本人の暮らしのあり様や日本の本来の学問のあり様を、今一度想起すべきではないか。

欧米型科学は必要である。しかし、それは自然と人間が共に生き共に生み出すために活用すべきであり、応用すべきであった。」

「原子力発電は安全であり、地球温暖化防止に寄与するという『安全神話』が時代をリードしたのも欧米科学への過信であった。いまや原発に依存するライフスタイル自体を変えざるをえない」と述べ、さらに、20世紀を総括して21世紀の人間と自然のあり方について次のように言及されています。

「20世紀は自然の破壊がいちじるしく進行し、環境の汚染がきわめて顕著となった時代であった。異文化の相互理解、多文化共生が強調されているが、自然と人間の共生が21世紀の新たな課題になっている。その共生は現状維持の『とも生き』にとどまらず、『古事記』が共生を『とも生み』と訓（よ）んでいるように、自然とともに新しい歴史や文化を創造することをめざしたい。鎮守の森のあり様は、新世紀における自然と人間の関係の再構築にかならずや寄与するにちがいない。」と。

こうした「自然と共に生きる」「自然と共に生み出す」という上田名誉教授の自然観は、先月号で見た寺田寅彦の自然観の延長線上にあり、また、山折哲男さんの自然観とも軌を一にしたものであり、縄文以来の日本人が日本の自然や風土で暮らすなかで体得した知恵ともいえるべきものであると言えます。

西洋の生み出した近代科学技術を日本に導入する場合にも、上田名誉教授が言うように「人間が自然と共に生き、共に生み出すという視点で活用すべきだ」ということを肝に銘じる必要があるのではないかと思います。このことが、3.11から教訓として引き出さなければならない大切なことではないかと思うのですが、皆さま方いかがでしょうか。

ところで、宮脇昭横浜国立大学名誉教授(現、地球環境戦略研究機関・国際生態学センター長)は、日本を代表する生態学者で、これまでも外国政府の招きで、マレーシアのマングローブ林の再生や中国の万里の長城付近の緑化などに取り組んでこられました。この宮脇名誉教授が、昨秋NHK ラジオ深夜便に出られ、「ガレキの跡に鎮守の森をつくろう」とのテーマでお話をされていました。

宮脇名誉教授は、3.11大震災が発生したとき、インドネシア政府の招きで熱帯雨林の調査に出かけられていましたが、ホテルのテレビで映しだされた東北の惨状を目にし、急遽予定を切り上げ帰国し、すぐに仙台市当局の協力で被災地の海岸地域の調査

に入られました。その結果を踏まえ、海岸地域が再びこのような悲惨な津波被害を蒙らないように、東北の太平洋岸に南北 300 キロメートルにわたる巨大な「鎮守の森をつくろうプロジェクト」を提案し、現在その実現に取り組んでおられます。

宮脇名誉教授は、人間の手による人工的な自然づくりが地域を災害から弱くしてきたと指摘しています。それは針葉樹に偏重した山林、景観づくりが、行われてきたことの問題点を指摘されています。日本の多くの海岸で防風林、防潮林として利用されてきたのは松の木（海岸部の松はクロマツ、内陸部はアカマツ）であり、それが歌にも詠まれる「白砂青松」の美しい景観を作り上げてきました。

しかし、宮脇名誉教授によれば、最後の氷河期が終わって人類 9000 年の歴史のなかで海岸部が松の木で覆われていたのは、ごく最近の短い期間であり、大半はタブノキ、シイ、カシ、ヤブツバキ、シロダモ、モチノキ、ユズリア、ハイノキなどの常緑広葉樹の高木、中木、低木で覆われていたようで、いわゆる照葉樹林の植生が形成されていました。これらの樹種は鎮守の森の樹種と全く同じで、鎮守の森の植物相は、古来日本の気候や風土に最も適した植物相として自然に形成されたものです。

日本の風土においては、植物相は、人間が人工的に手を加えなければ、最終的には全て常緑広葉樹（照葉樹林）に行きつく（「極相」）という特性を持っています。

歌に詠まれた「白砂青松の松原」というのは、人間の手により常緑広葉樹が生えてくれば除去することを繰り返すことにより、人工的に作られたものと宮脇名誉教授は言われています。また、里山も同じで、人間の生活に必要な柴や薪などの燃料を確保するため落葉広葉樹の森になるように、下草狩りや伐採などの人工的な手を加えて育ててきた山林です。

宮脇さんは、この松や、スギ、ヒノキなどの針葉樹中心の植栽を人工的に進めてきたのが最大の失敗と指摘されています。これら針葉樹の根は地表近くに這うようにしか伸びず、真下に伸びないため、保水力に乏しく災害には極めて弱いという特徴があるからです。そして今回の大津波では、この白砂青松の松が被害をより拡大する方向に作用したと宮脇さんの調査では判明しました。すなわち、最初の津波で全ての松の木が流され、これが次の引き潮で流された松の巨木が強力な勢いで家屋や建物にぶつかり、建築物は完膚なき状態で流されたというわけです。

また、地震とは別に平成 23 年 12 号台風は、紀伊半島の南部に甚大な被害をもたらしましたが、その甚大な被害をもたらした最大の原因は、戦後の植林政策、すなわちスギ、ヒノキに特化・偏重した植林政策にあると宮脇名誉教授は指摘されています。保水力のない、根が真っすぐ下に伸びず地表の表面を這うようにしか生えないスギやヒノキに、台風による大豪雨を持ちこたえよというのは土台無理なことです。70 年代以降の日本の社会経済環境の変化によるスギ林やヒノキ林の荒廃もそれに輪をかけ

ました。

こうした針葉樹と異なり、タブノキ、クスノキ（日本の固有種ではなく外来植物）、シイノキ、カシノキなどの常緑広葉植物は、根が地中深く真っすぐに伸びることから保水力にすぐれ、優れた自然の治水・治山機能を有しており、災害に非常に強い特性があります。現に宮脇名誉教授が行った被災地の調査でも、松は全て流されたけれども、これら常緑広葉樹は1本も流されず、全て残っていたという結果がでています。

「生物多様性」という言葉が生態学の分野ですが、多様性に人工の手を加え、特定の種に特化させると言う発想は、まさしく経済性、効率性のみを考えた発想で、あり、一時的に経済的に利益をもたらしたとしても結果的には、その利益を上回る大きなダメージを人間社会にもたらすこととなります。

宮脇名誉教授は、災害に強い日本古来の常緑広葉樹を中心に形成されてきた植物相に着目し、将来の大津波を想定した「平成の鎮守の森づくり」を提案されています。東北の太平洋岸300キロメートルに常緑広葉樹のグリーンベルトを作り、大津波のインパクトを最小限に食い止める「緑の防潮堤」構想です。今回の大津波では、巨大なコンクリートの防潮堤は一塊もなく横転し何の役にも立ちませんでした。しかし、宮脇名誉教授は自信をもって語られています。こうした大地深くしっかりと根を張る常緑広葉樹はどんな大津波が来てもびくともしないことが立証された。この平成の鎮守の森ともいべき緑のベルトを作ることにより大津波の被害は最小限に食い止めることができる。

宮脇名誉教授のお話を聞いていると、これこそ日本人が長年自然と向き合う中で身につけた知恵であり、また、上田名誉教授が言う「科学技術の利用は、人間と自然が共に生きる、共に生み出すという観点に立って活用すべきだ」との精神にも合致するものであると思いますが、皆さま方いかがでしょうか。



さて、いよいよ3月。日本では3月は区切りの月。今では、企業も3月以外の決算期を導入しているところも多くなっていますが、しかし大半の企業は未だ3月をで会計年度末として決算が行われています。もちろん役所や学校は例外なく3月で学年末を迎えます。

しかし、ヨーロッパの就学期間が9月から翌年の8月であることから、大学もこれに合わせ、海外からの優秀な学生を受け入れやすくし、また逆に日本の学生の海外の大学への留学をしやすくするために、ここ数年、東京大学や京都大学などでこの就学期

間を9月から変える動きが出てきています。大学も国際化の波に乗って行かないと生きていけないということからでしょう。

しかし、日本人は、季節の移り変わりを自然界の木々や草花、鳥や昆虫などの変化の中でとらえてきた感覚では、やはり卒業式や終業式は、梅の花が咲き、また菜の花が咲き始め、ウグイスが鳴き始める3月に、また入学式は桜が満開となる4月に行われてこそ、それぞれの行事に心が動かされるのではないかなと思います。残暑がまだまだ厳しい時期に卒業や、終業、入学を迎えるというのは、どうも感覚的に日本人の心とは合わないような気がします。皆さん方はいかがでしょう。

さて、そういうことで、3月は別れの季節でもあります。平成22年12月1日に、皆さま方との様々な出会いを大切に、また絆を大切にとの想いを込めてこのやすらぎ通信を発行してまいりましたが、この筆者もいよいよ卒業ということになりました。

3月中に作成する次号4月1日が、私が執筆する最後のやすらぎ通信ということになります。

“食後のデザート感覚で読んでいただけるニュースレター”をモットーに、四季それぞれの話題も入れながら、また、少し私の思いも入れさせていただきながら「個性あるニュースレター」としてご愛読いただけたものと思っております。

しかし、やすらぎ通信は決してこれで終わるわけではありません。また、筆者とは全く違った新鮮な感覚で新たに執筆される方にバトンタッチをすることにより、発行を続けてまいります。これまでと同様、是非引きつづきご愛読をいただきますようお願いいたします。

最後に、皆様方の末永き、ご多幸をお祈りして、お礼に代えさせていただきます。ありがとうございました。

## NEWS

### 【(新)PET-CT検診ができるようになりました—料金 98,000 円】

- ・当センターのPET-CT装置は国内で5台目のTOF技術(Time-of-Flight)を用いた世界最高水準のもので、ノイズの少ないクリアで高品質な画像を得ることができます。
- ・一度に全身(頭部から大腿部)のFDG-PETがん検診とCT検診を受診できます。
- ・診断は全て放射線診断専門医・PET診断認定医が行います。
- ・検査室のインテリアや照明は全体が落ち着いた心地よい空間となるよう、くつろげる環境づくりに配慮いたしました。

PET 検診ご希望の方は「患者相談窓口」にお申し出ください。

電話申し込みは「医療相談コールセンター」

06-6692-2800

06-6692-2801 まで

**【(継) 新たな専門外来—喘息専門外来を開設しました！ 免疫リウマチ科】**

このたび、気管支喘息（喘息）治療の標準化、喘息発作患者さんの受け入れ体制の改善、そして喘息死ゼロを目指して、喘息専門外来（成人）を開設しました。

気管支喘息（喘息—ぜんそく）の治療は、近年めざましく進歩しました。

喘息の診断にお困りの方、あるいはなかなかよくなりえない喘息患者さんは是非、当科の喘息専門外来（成人）を受診して下さい。

喘息に関しては、息苦しくなる発作がその時に治まるだけでいいというものではありません。発作を繰り返すことで、将来気管支が細くなったまま広がりにくくなり、また、気管支がより過敏な状態となることで重症になる可能性が高くなります。従って発作を予防する（炎症を治める）治療をすることが最も大切です。

吸入ステロイドを中心とした炎症を治める治療に重点を置き、抗 IgE 抗体療法なども積極的に導入させていただきます。また、必要な患者さんには喘息日誌やピークフローによる自己管理をお勧めし、その指導をさせていただきます。

ご相談は、免疫リウマチ科 主任部長 藤原 弘士 まで

**【(継) 小児消化器病・肝臓病のお子様の健やかな成長を支援します—小児科】**

当センター小児科では、消化器病・肝臓病の治療に積極的に取り組んでいます。特に炎症性腸炎疾患（IBD）・ウイルス肝炎については「小児消化器チーム」として専門診療を行っています。炎症性腸疾患は原因不明の慢性疾患であり、最近我が国の子どもでも増加しています。当小児科ではステロイド静注療法やステロイドパルス療法に加えて、白血球除去療法、免疫抑制療法（イムラン、タクロリムス）を取り入れた治療を行っています。治療の進歩によって入院回数と日数は大幅に減少し、初回の寛解導入の期間を除けば、おもに外来治療で寛解を維持できております。このことにより患者さんの日常生活や学校生活も大きく改善しております。とくに今年から難治性あるいは重症の潰瘍性大腸炎・クローン病のお子様を対象に、インフリキシマブ（商品名：レミケード）の治療を開始しました。従来の治療では良くならない炎症性腸疾患（IBD）のお子様でも劇的に良くなる方を経験しております。レミケードの治療の実際については、小児科主任部長などに遠慮なくお問い合わせください。

肝臓病ではウイルス肝炎（B型、C型）、自己免疫性肝炎、脂肪肝、脂肪肝炎、硬化性胆管炎、糖原病、ウイルソン病、原因不明の肝疾患などの診療を行っています。

とくにB型肝炎およびC型肝炎のインターフェロン治療（注射薬）、核酸アナログ治療（経口薬）に積極的に取り組んでいます。治療の進歩によってB型肝炎、C型肝炎ともほとんどのお子様において肝炎が良くなっております。

治療に難渋されている潰瘍性大腸炎・クローン病などの消化器病およびウイルス肝炎などの肝臓病に関してはどうぞお気軽にご相談下さい。

小児科 主任部長 田尻仁

### 【(継)臨床研究の新たな発展をめざし—臨床研究部を設置しました】

当センターでは、新たな医薬品、医療機器、治療方法などの開発を行うための臨床研究をこれまで以上に推進するため、このたび、新たに院長直属の「臨床研究部」を設置し、11の研究部門、1の臨床研究室(実験)でスタートしました。臨床研究部は、来年4月には「臨床研究センター」に発展させる予定です。各研究部門の概要は以下の通りです。

第1研究部門(がん)、第2研究部門(腎・心・血管・肺)、第3研究部門(代謝・消化器)、第4研究部門(精神・脳・神経・麻酔)、第5研究部門(免疫・アレルギー・移植・感染)、第6研究部門(救急・小児・周産期)、第7研究部門(運動器)、第8研究部門(生体画像・検査医学)、第9研究部門(薬学)、第10研究部門(看護学)、第11研究部門(医療疫学、医療情報)、臨床研究室(実験)

### 【(継) 進む！放射線治療装置を活用したがんの低侵襲治療—放射線治療科—】

当センターの放射線治療装置を一新して2年目に入っております。この期間に脳・肺・肝に対する定位照射、前立腺 IMRT (強度変調放射線治療) を順次開始し、昨年4月からは頭頸部腫瘍に対する IMRT も開始しました。画像誘導技術を用いた低侵襲治療が可能で、脳定位照射などいずれも外来通院で治療は完結できます。

現在では高精度治療は初診から数週間程度で、待機可能な前立腺癌に対する IMRT でも3ヶ月待ち程度で受けて頂くことが可能となっています。

また、小線源治療(高線量率遠隔治療および前立腺癌に対する低線量率ヨード線源永久挿入療法)も行っています。

放射線治療装置を用いたがん低侵襲治療に関しては、お気軽にご相談ください。

放射線治療科 部長 島本 茂利まで

### 【(継)前立腺がんの手術—内視鏡手術支援ロボット“ダ・ヴィンチ”による手術を他施設に先駆けて本格実施中！】

泌尿器科領域における手術の多くは腹腔鏡手術となってきています。副腎から始まり腎摘除術、腎がんの根治手術に適應され、現在は前立腺がんの手術にも多くの施設で腹腔鏡手術が主流となってきています。

当科では2009年から腹腔鏡下前立腺全摘術を開始し、2010年に施設認定を取得し2011年は69例の前立腺がん手術のうち36例に腹腔鏡手術を施行しました。腹腔鏡下手術は内視鏡で観察しながら行う手術の事で、お腹に大きな創を作ることなく、小さな穴を5~6箇所開けて直径5~12mmのトロカーと呼ばれる筒状の器具を通して行う、体に負担が少なくてすむ手術です。内視鏡で観察しながら行いますので、肉眼よ

りは拡大視野で行うためにより、細かい手術が可能となっています。尿失禁に関する尿道括約筋や勃起神経の温存が可能で、開腹手術に比較して出血量も極めて少なくなっています。傷の治りが早く術後の痛みが少ないため術後回復が早いことが特徴で、入院期間は10日から2週間ぐらいの期間です。

今年の診療報酬改定に伴い医療用ロボットを使った手術が保険で行うことが可能となったため、当センターでは府内の他施設に先駆けて、手術支援ロボット「da Vinci S」(ダ・ヴィンチ)を導入・活用し、前立腺がんの内視鏡手術を行っています。

このダ・ヴィンチによる手術の特徴は術者が拡大された3次元の画像を見ながら手術操作を行うところにあります。手術操作鉗子の先は手首や指の関節のようになめらかに動き、手以上の可動域を持っており、より細かな手術操作が可能となり、狭い骨盤の底で尿道と膀胱をつなぎ合わせる前立腺がんの手術には最適の医療技術です。前立腺はクルミ大の大きさで周囲は膀胱、直腸があり、周囲には血管や勃起に関する神経や尿道括約筋が存在します。拡大された3次元の画像を見ながら、術者の手の動きは縮小され、手ぶれも補正されて行われるため正確な手術が施行可能です。特に尿道と膀胱の吻合はダ・ヴィンチならではの有用性が生かされます。したがって、がんの根治性の向上はもとより、勃起機能不全や尿失禁などの合併症の軽減も期待できます。

#### 【(継)「医療相談」コールセンターのご利用を一地域医療連携室】

患者さんやご家族などからの医療や病院利用に関するご相談を、専門の看護師が電話でのご相談に応じさせていただく「医療相談」コールセンターを開設運用しております。是非お気軽にご利用ください。

電話番号は 06-6692-2800 (専用電話回線)

06-6692-2801 (専用電話回線)

相談日時 月曜日～金曜日

午前9時～午後5時

相談対象 医療相談を希望されるご本人若しくはご家族等

相談員 看護師

#### 【(継) 診察予約変更センター 11 診療科において診察の予約日・時間の変更を電話で受け付けています！】

当センターでは、下記の11診療科を対象に、電話で診察時間の予約の変更ができるよう「診察予約変更センター」を設置しています。是非、積極的にご活用ください。なお、このサービスは初診に関しては行っておりませんので、ご注意ください。よろしくお願いいたします。

(電話番号) 06-6692-1201 (代表) にダイヤルして

「予約変更センター」と言ってください。

(受付時間) 午後3時～午後5時(平日のみ)

(対象診療科) 内科・呼吸器内科 消化器内科 糖尿病代謝内科 整形外科  
免疫リウマチ科 皮膚科 形成外科 腎臓・高血圧内科  
神経内科 脳神経外科 耳鼻咽喉・頭頸部外科

【(継)入院治療費の概算に加え、新たに外来での検査費用の概算を予めお知らせするサービスを始めました。】

当センターにおきましては、入院患者さんへのサポートを総合的・集約的に行う入院センター（やすらぎセンター）におきまして、ご入院申し込み時に予め標準的な治療を行った場合の概算費用をお知らせするサービスを行っています。

また、昨年、11月1日から、新たに、CT、MRI、RI、エコー検査など検査費用の概算を医療・福祉相談コーナーなどでお知らせするサービスを開始しました。

## 今月の催し

【(新) 府民公開講座—ロボット手術って何?】

～ 泌尿器科で行っている、主に前立腺がんのロボット手術について ～

日 時 3月9日(土) 午後1時30分～3時

場 所 本館3階講堂

講 師 泌尿器科主任部長 山口 誓司

(先着100名 無料)

【(新) 大好評!!】

相愛大学連携・外来糖尿病教室 ～知って得する!糖尿病の付き合いかた～】

日 時 3月13日(水) 午後2時～3時30分

場 所 本館1階アトリウム

内 容 「インスリンの話」

糖尿病代謝内科 医師 藤田 洋平

「検尿のおはなし」

臨床検査技師 谷 恵里子

「コンビニ活用術」

栄養管理室 管理栄養士 笠井 香織

(参加無料)

【(新) 今月のすこやかセミナー】

① がん細胞って、どんな顔？—ミクロの世界にようこそ

日 時 3月14日(木) 午後2時～3時

場 所 本館3階保健教室

講 師 病理科 臨床検査技師 藤中 浩樹

(参加無料)

① 顎が腐る病気を知っていますか？—顎骨髄炎について

日 時 3月22日(金) 午前11時～12時

場 所 本館3階保健教室

講 師 歯科口腔外科 診療主任 大竹 一平

(参加無料)

【(新) 第13回万代・夢寄席—平成の成長株！“桂かい枝落語会—】

日 時 平成25年3月14日(木) 午後2時～

場 所 本館3階講堂

出 演 平成の成長株！

桂 かい枝

主 催 万代やすらぎ亭

(入場無料)

【(新) 恒例！合唱団 TG「まっぼっくり」Spring コンサート】

日 時 3月18日(月) 午後1時30分～1時50分

午後2時15分～3時15分

場 所 本館1階アトリウム (1時30分～)

本館3階講堂 (2時15分～)

出 演 帝塚山学院関係者の皆さんで作る TG 合唱団「まっぼっくり」

内 容 合唱(男・女・混声)、弦楽アンサンブル・マンドリン・ピアノソロ・  
ケルティックハープなどの演奏

(入場無料)

【(新) 第24回相愛大学連携コンサート—弦楽四重奏—】

～グレースフルな弦の音に、優しい春の光を見つけよう～

日 時 3月21日(木) 午後2時～

場 所 本館3階講堂

出 演 Petit Cadeau Quartet (プティ・カド・クアルテット)

相愛大学音楽学部音楽学科弦楽器専攻1回生4人で2012年10月に結成。Petit Cadeauとは「小さな贈り物」という意味があり、すてきな音楽を届けたいと活動しているグループ。

渡部 綾 1st Violin

神谷 将輝 2nd Violin

山本 成 Viola

片岡 あずさ Cello

演奏曲目 ハイドン：弦楽四重奏曲 ト長調 作品76 1番より 第1楽章

リー ハーライン : 星に願いを

見岳 章 : 川の流れるように

ルロイ・アンダーソン：プリンク・プランク・プルンク

アンドレ・ギャニオン：めぐり逢い

中田 章：早春賦

(入場無料)

### 【(継) 第8回病院ギャラリー企画展】

#### —昭和の巨人・グラフィックデザイナー 田中一光の世界—

戦後から昭和が幕を閉じるまでの期間、日本のグラフィックデザイナーの絶えずトップランナーを突っ走った田中一光。その鋭い感性で、未来を鋭くキャッチし、広告やポスターデザインに取り入れ時代を先導した姿に、多くのフォロワー達が胸を熱くし、今もなお彼の姿を追いかけている。

今回は、大阪を中心に活躍した、我が国のグラフィックデザイナーの巨匠が残したポスター作品の数々の中から、我が国の経済が絶頂期にあった大阪万博以降の作品を取り上げて時代をともにたどります。

本企画展は、大阪府江之子島文化芸術創造センターのご協力を得て実施します。

日 時 平成24年12月25日(火)～平成25年4月19日(金)

(午前9時～午後5時30分)

場 所 本館2階 現代美術空間 病院ギャラリー

#### 展示作品リスト

- ① 1973年 日本の選択 (毎日、日本研究賞論文募集、新聞広告)
- ② " 上方芸の会
- ③ " サンケイ観世能
- ④ " 演劇「探偵」(劇団四季 西武劇場)

- ⑤ 〃 結城 人形座公演
- ⑥ 1974年 演劇「桜の園」(チェーホフ作、劇団民藝、西武劇場、東京)
- ⑦ 1976年 Music Today “76
- ⑧ 1977年 Hanae Mori
- ⑨ 〃 曼荼羅展 1977
- ⑩ 〃 JAPAN STYLE
- ⑪ 1979年 ゆめつづれ
- ⑫ 1981年 マルシエル・テュシャン展
- ⑬ 1982年 緑と人
- ⑭ 〃 草月：創造の空間展
- ⑮ 〃 多彩な食卓：House Food
- ⑯ 1983年 サンケイ観世能
- ⑰ 1984年 ヨーセフ・ボイス展
- ⑱ 1985年 Music Today “85
- ⑲ 〃 中村宗哲歴代展
- 20 〃 イサム・ノグチ展
- 21 1986年 Japan
- 22 〃 オープン 銀座セゾン劇場
- 23 〃 カルメンの悲劇
- 24 〃 チャオ・イタリア
- 25 1988年 Street
- 26 1989年 セゾン美術館
- 27 1990年 グラフィックデザインの今日
- 28 〃 三宅一生展 TEN SEN MEN
- 29 1991年 CANADA”91
- 30 1993年 文字の演技力
- 31 1996年 人間と文字—エルトリア
- 32 〃 In Search of Elegance
- 33 〃 モリサワ フォント (A)
- 34 〃 New Japanese Graphics 以上 34 作品

**【(予告) 第9回病院ギャラリー企画展**

**岩宮武二 “アンコールワットで仏像を撮る” 写真展】**

岩宮武二は 1920 年に鳥取県米子市に生まれ 89 年に没するまで、日本を代表する写真家として活躍。1966 年 46 歳で大阪芸術大学の教授となり、後進の育成に貢献した。「今に生きる」を座右の銘にしていた岩宮が、クメール・ルージュによる厳しい破壊にもかかわらず生き残ったアンコールワットの仏像たちを過去から現在、現在から未来への時間的流れのなかで優しく切り取った秀作で今回の企画展を構成。

開催期間 2013 年 4 月 22 日(月)～8 月 23 日 (金)

(展示作品 35点—撮影 1986年)

- ・ アンコールワット正面全景
- ・ 第一回廊と中央祠堂
- ・ 獅子
- ・ 経蔵
- ・ カウラーヴァ軍とバーンタバ軍の戦闘
- ・ 闘う兵士と怪鳥
- ・ バンタヴァ軍と軍像
- ・ 十字中回廊
- ・ 群舞するデヴァター
- ・ 十字中回廊の諸尊
- ・ 連子窓
- ・ アシュラ像・アンコールトム
- ・ 南大門・アンコールトム
- ・ 南大門四面仏・アンコールトム
- ・ 像の訓練・象のテラス
- ・ たわむれる子どもたち
- ・ 戦闘用の牛車・象のテラス
- ・ 五つ頭の神馬・象のテラス
- ・ 踊る守護神・象のテラス
- ・ 第一回廊・バイヨン
- ・ 人々の暮らし・バイヨン
- ・ 食事の支度・バイヨン
- ・ 闘うチャム軍とクメール軍
- ・ 第一回廊列柱・バイヨン
- ・ 蓮の上で踊るアブサラス・バイヨン
- ・ 中央祠堂・バイヨン
- ・ 四面塔
- ・ バイヨンの微笑
- ・ バンテアイ・フレイ正面
- ・ 獣面人身像
- ・ 守護神
- ・ グリシュナとバララーマ
- ・ 五つ頭のナーガ
- ・ 人面塔・プリヤ・カン
- ・ プレー・ループ全景

**【(予告) リウマチ患者さん、ご家族のための医療講演会】**

日 時 4月28日(日) 午後2時～3時30分

場 所 堺市総合福祉会館 4階第3会議室 (定員 54人)

講 演 膠原病教室～関節リウマチを含めて

講 師 免疫リウマチ科 主任部長

免疫リウマチ・バイオサポートセンター長

藤原 弘士

(お問合せ) 特定非営利活動法人 堺難病連

しままち 様 (090-3972-5874)

【(予告) リウマチ教室—平成 25 年度、第 1 回】

日 時 5月14日(火) 午後2時～3時30分

場 所 本館3階保健教室

① 最新の関節リウマチ治療 ～生物学的製剤を中心に～

講 師 免疫リウマチ科 主任部長

免疫リウマチ・バイオサポートセンター長

藤原 弘士

② 自己管理、自己注射指導

講 師 免疫リウマチ科外来 看護師主任

浦出 節子

【(予告) 第 14 回万代・夢寄席 —旭堂小二三 講談の会—】

～若手女流のホープ、旭堂小二三の人情講談！～

日 時 平成 25 年 4 月 23 日(火) 午後 2 時～

場 所 本館 3 階講堂

出 演 旭堂 小二三

(入場無料)

【(予告) 元宝塚歌劇団花組！湯井一葉 (ゆい かずよ)・シャンソンコンサート】

～プロのシャンソン歌手による素敵なコンサート — 気分はパリの街角に

湯井一葉さんは、宝塚歌劇団花組を退団後、パリに留学。帰国後、関西を代表するシャンソン歌手として東京、大阪等でコンサート活動、ホテルのディナーショーと幅広く活躍を続けられ、1988年には大阪文化祭奨励賞を受賞されました。明るくさわやかな実力派歌手として、シャンソンの固定観念に縛られない新鮮で洗練されたステージと共に、幅広い世代に親しまれています。

日 時 平成 25 年 5 月 20 日(月) 午後 2 時～

場 所 本館 3 階講堂

出 演 湯井 一葉 (ゆい かずよ)

ピアノ:河野 良 (かわの りょう)

(入場無料)

### 纒 (ともづな)

本コーナーは、当センターと様々な形で連携し、地域により地域を支えるという理念を共有している個人、団体が主催されているイベントをご紹介します。

### 【(新)当センターがん遺族会 “赤とんぼの会” Aさんからの便り】

「私は一昨年の9月、最愛の主人を末期の肝細胞がんで亡くしました。検査結果を私と姉で聞きに行き、末期ということで治療方法もなく、どうしたらいいのか受け止めることもできず、主人は3週間で私をおいて一人旅立ってしまいました。57歳でした。子どもを3人育て結婚させ、これから二人の人生を楽しもうと話合っていた矢先のことでした。

私は何故もっと早く病気に気づいてあげられなかったのかと、毎日毎日自分を責め続けました。後悔ばかりが残り、毎日食べることも外出することもできず家に引きこもりの生活となってしまいました。

2か月が過ぎた頃、娘が「お母さん、病院のなかに“赤とんぼの会”というのがあるんやけど一度行って見たら？」と声をかけてくれました。娘に励まされ、勇気を出して行くことにしました。

タクシーに乗り、病院に着くなりとても辛くなり、涙が溢れ3階のエレベーターの前で待っていてくださった担当の看護師さんに抱きついて泣いてしまいました。部屋に入ると参加されている方々に紹介していただき、またその場で泣き続けてしまいました。だけど、このような私を赤とんぼの会のメンバーは暖かく包み込み迎え入れてくれました。

「あなた一人じゃないみんなと一緒になのよ。思いはみんな同じよ、大丈夫。」と励ましていただいたことが心の奥まで届き、帰るときには涙は止まっていました。また、翌月も、メンバーのお話しをお聴きし、泣いてばかりの日々を送っていました。

しかし、それがいつしか毎月の赤とんぼの会の定例会が待ち遠しくなっている自分に気づき始めました。外出するのは苦手でしたが、いつの日か赤とんぼの定例会の日に皆さんに会えることがとても楽しみになり、朝からうれしい気分になることができました。

皆さんに甘えさせていただき元気をいただき一年が過ぎ、今は赤とんぼの会と出会えたことに感謝する日々を送っています。

私と同じ経験をされている方、一度赤とんぼの会の活動に参加しませんか？扉を開けてみませんか？みんなが待っていてくれますよ。

『赤とんぼの会』は毎月第1・3木曜日 15時～17時、本館3階討議室(難病医療情

## Topics

### 【(新) やすらぎのpromenadeで春の訪れをキャッチー北側通路周辺ー】

いよいよ季節は暦の上で春を迎えました。3月は何かとあわただしい月ですが、promenadeの花たちは表面的にはまだ物静かです。

しかし、今月も末となりますとpromenadeでも植物の生命の息吹が感じられるシーズンを迎えます。さあ、天気の良い晴れた日にはpromenadeのベンチに腰を下ろし、新鮮な春の空気を胸いっぱい吸い込み、春の訪れを楽しんでみるというのはいかがでしょうか。

## 今月のひまわりさん

各種窓口でセンターご利用のお手伝いをさせていただいている医事事務委託会社ソラストの窓口担当を紹介させていただくコーナーです。

### 【(新) 障がい者外来担当 佐藤さんの巻】

障害者外来は、リハビリ科と障がい者歯科にご予約の患者さん、そして障がい者自立センターに入所されている患者さんが主に来られる外来です。

定期的に受診されている方が多く、一日に来られる患者さんの数も本館の外来のように多くはないこともあり、一人一人の患者さんやそのご家族とのコミュニケーションを大切に、よりていねいという気持ちで対応させていただいております。

また、時には患者さんやご家族に顔を覚えていただき、お声をかけていただいたときには大変うれしく感じます。

特に自立センターに入所されている患者さんとは、お顔見知りになることも多く、お話する機会が増えていくことは、とってもうれしいことです。

たった一言の挨拶というお声掛けから、患者さんに話しやすさを感じて頂き、そして、少しでも親しくお話をさせていただくことにより、やすらいだ気持ちになっていただけたらと思います毎日業務に励んでいます。

## その他のお知らせ

### 【(継) やすらぎ通信はメルマガで！】

「やすらぎ通信」は、メルマガでも配信しております。ご希望の方は、当センターホームページからアドレスを登録していただきますようお願いいたします。なお、ホームページのご検索は、「大阪府立急性期・総合医療センター」にて可能です。

**【(継) 医療費の支払いはキャッシュカードでできます！】**

当センターの医療費自動精算機は、デビットカード対応となっておりますので、ほとんどの金融機関のキャッシュカードでお支払いができます。

これらの金融機関は J-Debit に加盟していますので、キャッシュカードに自動的にデビット機能が付与されているからです。(ただし、キャッシュカードでお支払いいただいた場合は即座に口座から引き落とされることとなるため、口座に引き落とし金額以上の残高が必要ですのでご注意ください。)

このため、医療費の支払いのための現金を持たなくても、キャッシュカードさえあればお支払いが可能です。

また、引き落としの手数料は不要ですので大変便利です。是非ご利用ください。なお、合わせて一般のクレジットカードでのお支払いもできます

当センターは、当センターが「希望の医療空間」「よろこびの医療空間」「やすらぎの医療空間」となるよう日々努力しています。